

書評 03

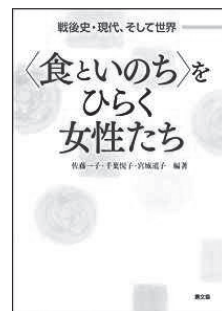
佐藤一子・千葉悦子・宮城道子 編著

『〈食といのち〉をひらく女性たち 戦後史・現代、そして世界』

一般社団法人 農山漁村文化協会 / 2018 年 4 月刊 / 254 ページ / 2500 円 + 税
ISBN 978-4-540-17111-6

評者：山野 薫

一般社団法人 食品需給研究センター



人の体は口から採ったものだけでできている、と言われる。人間は、生きていくために必要な栄養素を植物のように自らで作り出すことはできず、食事によってのみ摂取することができる、もしくは、人間が食事によって摂取した栄養素はすべて生きていくために体に蓄えられる、という意味である。しかし、暮らしのなかで食事が担う役割は単なる生命維持だけではない。家族や友人との楽しみの共有やコミュニケーションの創出、地域の行事やイベントなどを通じた伝統食などの継承とコミュニティの形成、仏伊韓をはじめとする日本以外の国や地域の文化を知るきっかけになることなど、人生を豊かにするための多くの役割がある。したがって、どのような食をどのように摂取するか、というのはすべての人々にとって重要な問題となる。しかし、現代では食をとりまく環境が非常に複雑になっているため、いくら個人の好みや生活習慣が多様であることを差し引いても、その解は到底簡単に見つかるものではない。

このように食をめぐる問題においてはすべての人が当事者となるが、なかでも「狩猟・漁労の時代から家事・育児を中心的に担い、家内労働や就労で多忙であっても、家族の生活や地域の共同行事における食の営みの主役であり続けてきた (P 7)」のは女性である。本書は、近代から現代に至る食と女性の歩みを振り返り、女性の主体形成と発信が大きく社会を変えてきたことを確認した上で、日々行われている実践

的なとりくみを紹介するものである。「食の貧困、困難を克服し、暮らしのなかで豊かな食文化の創造を通して、食といのちの問題に向き合う女性たちの社会的ネットワークのもつ発信力と社会変革への可能性 (P 1)」に着目し、全編を通して、どのように「生活の知恵と技術を活用して相互に学びあい、支え合って社会参画と社会発信 (P 1)」を行ってきたのかを明らかにしている。

本書の構成は以下のとおりである。

序章 いのちを育む食に向き合う

第1章 戦後農村における生活改善と女性

第2章 食・いのち・暮らしを守る農家女性の
協同活動

第3章 地域の食を守る農山漁村の女性起業

第4章 食の安全・共同の子育てを求める生協
女性ネットワーク

第5章 福島原発の足元で食の安全を築く女性
たち

第6章 地域の「食」を協同労働で支える一ワー
カーズ・コレクティブと高齢者生協の事
例から

第7章 地域と連携する学校給食と食育

第8章 食を通して暮らしをつくり守る「こど
も食堂」

第9章 イタリアのスローフード運動と食教育
の推進

第10章 オーガニック食品を求めるドイツの
女性運動

第11章 韓国の「食」運動の創造的展開と食生活教育

第12章 持続可能な社会とアジアの女性たちの社会参画—食の創造者として、生活を育む者として

このうち、第1～4章は「Part I 食の安全と暮らしの創造に向けた女性たちの歩み—戦後史—」、第5～8章は「Part II 現代日本の食といのちを守る女性たちの取り組み—実践と課題—」、第9～12章は「Part III 国際社会に広がり発信される食の安全と食文化—国際的展開—」となっており、暮らしのなかの食とそれらに向き合う女性たちの様子を歴史的、社会的、国際的と複数の視点から捉えている。

Part I では、戦後以降の女性の暮らしや家庭内での役割がどのように移り変わってきたか、その流れのなかでどのような問題が表出し、女性たちはどのようにそれらと対峙してきたのかをまとめている。女性たちが食と暮らしの向上を目指して主体的に展開してきた活動は、地域の共同を軸に生産と消費を結び付けようとするものであることを示している。

Part II では、日々の生活のなかから、食の安全、地域住民の食へのアクセス、学校給食と食育、貧困問題と子どもの食といった課題の存在を掘り取り、解決のための実践と社会への働きかけを行う女性たちの行動を取り上げている。いずれの課題も、すぐに解決策や答えが導き出せるものではないが、「実践に伴走しつつ行き詰まりを解消するような学習やネットワークの構築への支援、その先を見通す力量の形成(P175)」を目指している。

Part III では、食の安全を守るために、生産者と消費者が連携した市民運動が国際的にはどのように展開されているのかを、イタリアのスローフード運動と食教育の歩み、ドイツにおけるオーガニック食品の拡大の様子、協同組合を軸として展開してきた韓国の「食」運動などから学ぶ。いずれの事例においても、人々の健康

や食品の安全性などを求めるだけでなく、環境問題や持続可能性、教育と女性の社会的地位など、広い視野を持って課題にアプローチし、暮らしと食を守ろうとする女性たちの姿勢が印象的である。

さて、まえがきでは、「本書の12名の共同執筆者は全員が女性であり、それぞれが多様な研究領域・研究方法を通じて食の問題にアプローチしてきた。(中略)性別役割分業のなかで女性を中心となってきた食をめぐる歴史と社会的実践を多様な研究の視点から振り返るという意義ももっている。(P 2)」とある。しかし、本書が持つ意義は、はたしてそれだけだろうか。

Part I でも紹介されているように、農村の女性たちは生産活動と生活の両方、とりわけ家族の食を支えるという面においてその役割を無自覚的に担ってきた。一方、都市部においても、家族の食を支えるという役割はより強く、これまた、さも当たり前であるかのように女性たちに課せられてきた。つまり、いつの時代もどの社会でも、家族の食を支える役割は、当然のものとして女性が担ってきた。この根底に、性別役割分業への意識があることは本書でも述べられている通りである。しかし、ここでスポットを当てている取り組みや社会に対する発信からは、ごく自然に、家庭の延長として社会に働きかけようとする姿勢が共通して読み取れる。目的が「家族のため」から「社会のため」に移行しても、そこで必要以上に尻込みすることはない。加えて、とりくみの端々には生活者の目線も織り込まれており、規模が小さい、定着まで年月がかかるといったことはあるものの、各々が抱える本来の課題の核心に着実に迫っていることを浮き彫りにしている。

ところで、このような女性発信の活動を男性たちはどのように受け止めているのだろうか。それぞれの取り組みの続編として、次は男性たちの関わり方も見てみたい。